様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 １５ 日現在

機関番号：３２６８９
研究種目：研究活動スタート支援
研究期間：2021～2022
課題番号：２１Ｋ１９９６４

研究課題名（和文）インドへ渡ったチベット仏教僧：『チャク・ロツァワ・チュージェペル伝』の校訂と訳注

研究課題名（英文）Toward a Critical Edition and Translation of the Biography of Chag lo tsa ba Chos rje dpal, a Tibetan Monk Travelling in India

研究代表者
藤本　庸裕（Fujimoto, Yosuke）

早稲田大学・文学学術院・助教

研究者番号：２０９０５７６５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、13世紀にインド・ネパールの各地を巡ったチベット人学僧チャク・ロツァワ・チュージェペル（Chag lo tsa ba Chos rje dpal, 1197-1264）の伝記の写本を解読し、第1章から第4章までの校訂テキストと英訳を作成した。これにより、13世紀のインド仏教を取り巻くインド・ネパールの社会情勢や地理、習俗、信仰の一端を、チベット人の記述を通して明らかにし、歴史資料に乏しいインド仏教に関して幅広い分野で利用可能な、新たな基礎資料を提供した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究では、これまで知られていたゲッティンゲン大学所蔵の写本に加え、近年利用可能になったBDRC（Buddhist Digital Resource Center）の手書き写本を新たに用いることで、より正確にテキストの内容を理解することが可能となった。また、とりわけ今回解読した第2章には、チュージェペル自身がネパールで現地の学者に学んでいた様子を記す記述が含まれており、チベット人翻訳官（ロツァワ）とインド人学者との間の思想的、文化的な交流の問題を解明する上でも、本研究の持つ意義は極めて大きい。

研究成果の概要（英文）：This study produced, based on newly accessible manuscripts, both a critical edition of Chapters 1-4 of the biography of Chag lo tsa ba Chos rje dpal (1197-1264), a Tibetan monk-pilgrim who travelled around India and Nepal in the thirteenth century, and an annotated English translation of the text. Through the lens of this Tibetan's descriptions, I shed some light on the social context, geography, customs, and beliefs surrounding Buddhism in thirteenth-century India and Nepal, thus providing new, basic data that will be available to researchers across a wide range of fields, especially in Indian Buddhism, for which historical sources are scarce.

研究分野：インド仏教

キーワード：チベット仏教　伝記　チャク・ロツァワ　チュージェペル　ダルマスヴァーミン

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

インド仏教の具体的実情をインド側から記した歴史資料、とりわけ文献資料は、碑文などを除くと皆無に近い。その代わりに有益な資料となるのが、本場の仏教を求めてインドに遊学した仏教僧たちの記録である。たとえば、7 世紀の玄奘の『大唐西域記』や義浄の『南海寄帰内法伝』は、当時のインド仏教の情勢を記す第一級の資料としてよく知られている。その一方で、これら中国側の資料のほかに、それと同等の価値を有しながら日本ではあまり研究されていない資料に、チベット人仏教僧たちの伝記（rnam thar）がある。なかでも、13 世紀にネパールとインドへ遊学したチベット人学僧チャク・ロツァワ・チュージェペル（Chag lo tsā ba Chos rje dpal, 1197–1264, インド名 Dharmasvāmin）の伝記（以下『チュージェペル伝』）は、当時のネパールやインドの社会情勢や地理、習俗、信仰について詳しく記し、とりわけイスラム教徒の攻勢によりナーランダーの仏教寺院が破壊されていくさまを目撃した唯一の仏教側の資料である。このように、同書はインド仏教のみならず、イスラム教やインド、チベット、ネパールの歴史、言語、宗教の研究にも裨益することから、その資料的価値は玄奘の『大唐西域記』に匹敵すると言われている。

『チュージェペル伝』の最初の翻訳は、1959 年にゲオルグ・ルーリッヒ（George Roerich）によって校訂テキストとともに出版された。現在まで欧米圏の研究者はもっぱらこのルーリッヒの英訳に依拠しているが、既に櫻部建が書評で詳しく紹介しているように、諸事情によりその校訂テキストには大量の誤植が見られ、英訳も原文を飛ばして訳している箇所が多い。1990 年代に中山照玲と田崎國彦によって日本語による部分訳が発表されたが、それ以降同書の翻訳研究は行われていない。恐らくその主な理由は、それまで知られていた写本が、ラーフラ・サンクリティヤーヤナ（Rāhula Sāṅkṛtyāyana）がナルタン寺で撮影した 1 本しかなく、その写真フィルムのアクセスが難しかったこと、そして写本自体も縮約字体を多用し、解釈の困難な箇所が少なくなかったことにあると思われる。1981 年に出版されたチャンパ・トゥプテン・ゾンツェ（Champa Thupten Zongtse）による刊本は、写本の翻刻も載せ、校訂の精度もルーリッヒの刊本より高かったため、日本語訳者たちの底本として用いられた。しかし、一次資料の制約上から、なお解釈の困難な箇所は多く残されたままであった。

ところが近年、この資料を巡る状況は大きく変わる。1968 年以降、ドイツのゲッティンゲン大学図書館がサーンクリティヤーヤナの写真フィルムのコピーをインドのパトナ博物館から購入し、近年それらを公開した。これにより、ルーリッヒが用いた写本へのアクセスが可能となった。さらに、BDRC（Buddhist Digital Resource Center）がこれまで入手困難であった、1969 年にベナレスで出版されたパンチェン・ウートゥル（Pan-chen-os-tul）校訂の刊本――これはルーリッヒの刊本にもとづく――とダラムサラで出版された刊本、そして最も重要なことに、デプン寺に由来すると思われる新たな『チュージェペル伝』の写本をインターネット上で公開した。これまでの研究では全く知られていなかったこの BDRC の写本は、ゲッティンゲンの写本では縮約文字となっている箇所を正書法で記すなど、ゲッティンゲンの写本よりも概して良い読みを与えており、これまで解読の困難であった箇所の多くがこの写本によって解決すると思われる。加えて、この 10 数年間で大量の古典チベット語文献が画像データや電子データとして利用可能となり、近年、パンチェン・ウートゥルの刊本にもとづく『チュージェペル伝』の電子データが公開された。

以前から『チュージェペル伝』の歴史的重要性を感じていた応募者は、このように原典資料のアクセス性が改善したことを受けて、より完成度の高い批判校訂テキストと翻訳の作成に着手した。

２．研究の目的

本研究の目的は、『チュージェペル伝』の写本を解読し、批判校訂テキストと翻訳を作成することを目的とする。これにより、13 世紀のインド仏教と当時の社会情勢やインド・ネパールの地理、習俗、信仰の関係を、チベット人たちの記述を通して明らかにし、歴史資料に乏しいインド仏教に関して幅広い分野で利用可能な、新たな基礎資料を提供する。また、チュージェペル自身は翻訳官（ロツァワ）として仏教の典籍を訳し、チベット大蔵経の形成に携わった。基本的にチベット語の仏典はチベット人学者がインド人学者に就いて共同で翻訳したものである。ゆえに『チュージェペル伝』からは、チュージェペルがインド人学者からどのような方法で学んだのかという問題を含めた、異言語・異文化間における思想伝承に関する情報を得ることが期待される。本研究を通して、チベットと南アジアにおいて当時のチベット人たちが行っていた宗教的実践についても新たな知見を加えたい。

３．研究の方法

本研究は、従来の研究では参照できなかった二つの写本にもとづく。一つはこれまで知られて

いたゲッティンゲン大学図書館に所蔵されているラーフラ・サンクリティヤーヤナ将来の写本（書架番号 Xc 14/71）、もう一つは近年 TBRC（現 BDRC）がインターネット上で公開した写本のデータ（BDRC WA26615）である。後者の写本の冒頭には“ phyi ra 183(?) ”と書かれており、『デプン古籍目録』（*'Bras spungs dgon du bzhugs su gsol ba'i dpe rnying dkar chag*），p. 1563 の整理番号 017646 にも『チュージェペル伝』の情報があることから、同写本はデプン寺の十六羅漢堂に持ち込まれ、保管されていた典籍であると思われる（ただし、目録の書名と作者名は写本の記載とは異なっている）。

本研究では、写本を解読するための基礎作業として次の 2 点を行う。

（1）ゲッティンゲン大学所蔵の写本（以下、写本 G）とデプン寺由来の写本（以下、写本 D）の翻刻、すなわちディプロマティック版の対照表と校訂テキストを作成する。この二つの写本はわずかに単語や語順が異なる場合があるものの、内容はほとんど同一であり、一方の写本において不明瞭な箇所がある場合には、他方の写本の対応箇所からその内容を推定することが可能である。ゾンツェの刊本にも写本 G の翻刻が載せられているが、それは手書きのチベット文字で書かれ、ごく稀ではあるが読み誤りが見られる。よって、両写本の異同を正確かつ速やかに把握することが可能な対照表を作成し、それにもとづいて校訂テキストを作成する。

（2）（1）で作成した校訂テキストにもとづき現代語訳と注釈を作成する。従来、『チュージェペル伝』の一部には、ションヌペル（gZhon nu dpal, 1392–1481）の歴史書『青史』（*Deb ther sngon po*）に平行話があることが指摘されていたが、その他、インドへ渡った他のチベット人僧侶たちの伝記にも、インド人学者に学ぶときの作法など、類似した話題が見られることが近年の研究で報告されている。そうした並行話から『チュージェペル伝』のなかの解釈が難しい箇所についても何らかの手がかりを得られることが期待される。よって、関連する文献や写本の情報を可能な限り収集する。

４．研究成果

研究初年度では、以上の方法によって、第 1 章から第 4 章までの写本の部分を解読し、英訳を作成した。その際、写本 G では縮字体となっている箇所の多くが写本 D では通常の字体で書かれ、基本的に写本 D のほうが明瞭な読みを示していること、また従来は散文と見なされていたが実は韻文であった箇所がいくつか見つかったことから、ゾンツェによる校訂テキストを幾分か訂正し、ルーリッヒの英訳や日本語の先行訳の解釈を大幅に修正することができた。また、『チュージェペル伝』にはナーガールジュナ（Nāgārjuna）の『ラトナーヴァリー』（*Ratnāvalī*）や大乗経典からの引用、ションヌペルの『青冊』や他のチベット僧の伝記との間に並行話のあることが指摘されていたが、本研究では、他にもアバヤーカラグプタ（Abhayākaragupta）の『ヴァジュラーヴァリー』（*Vajrāvalī*）にヴァイシャーリー市のターラー像に関する平行話を見出すことができ、当該部分の校訂テキストの作成が大いに進展した。

研究次年度では、研究開始当初には入手できなかった刊本をいくつか入手することができたので、改めて従来の刊本についても調査を行った。ゾンツェによる校訂テキストの出版以後、2011 年にダラムサラで、2016 年にラサで、2018 年に香港でチベット僧の伝記集がそれぞれ出版され、それらのなかに『チュージェペル伝』が収載されている。このうち、香港で出版された刊本（BDRC WA3CN21836）は入手できなかった。2011 年にダラムサラで出版された刊本（BDRC W1KG20987）は大体ゾンツェの読みに一致しているので、写本 G を底本にした刊本にもとづいていると思われる。しかし、2016 年にラサで出版された刊本（BDRC WA1KG25249）は従来の二つの写本とは著しく相違していることが判明した。例えば、写本 G と写本 D にある文がこの刊本では存在しなかったり、時にその逆の場合もあったりするなどの相違が見られ、また、チュージェペルの祖父の記述が母の箇所に置かれているなど、文の順番がこれまでの写本と大きく異なる箇所が多々存在する。全体的に、この刊本は従来のテキストにある単語を削って読みやすい文に整えている傾向があるが、それは校訂者が既存の刊本を大幅に書き換えて編纂した結果そうなっているのか、それとも上の二つの写本とは別系統の写本にもとづいて校訂したものであるのか、最終的な確定はできていないが、現時点では後者の可能性が疑われる。なお、上の二つの写本の不明瞭な箇所に関して、時にこの刊本の読みが役立つ場合がある。

今後の研究の展望として、以下の課題を解決する必要がある。まず、『チュージェペル伝』はチュージェペル自身が語った内容をジュワ・チューダル（'Ju ba chos dar）という在家者がその場で筆記して作成したと言われているように、口語的な文体が混じり、文構造が非常に把握しにくい場合が多い。その上、当時の口語と思われるチベット語や、インドやネパールの俗語と思しき転写語など、未だに解釈の不明な文章や辞書に載っていない単語が少なくない。よって、テキスト全体の翻訳を作成し、出版するためには、そうした不明瞭な単語や文章を集中的に解明していく必要がある。

【刊本】

Roerich, George N. *Biography of Dharmsvāmin (Chag lo-tsa-ba Chos rje dpal), A Tibetan Monk Pilgrim*. Patna: K. P. Jayaswal Research Institute 1959.

Pan-chen-os-tul. *Biography of Chag-lo-tsā-ba Chos-rje-dpal by Śākya'i dge-bsñen-chos-dpal-dar dpyaṅ*. Varanasi: A. K. Bose, The Indian Press 1969. [BDRC MW3CN8805]

Zongtse, Champa Thupten. *The Biography of Chag lo-tsā-ba Chos rje dpal (Dharmasvāmin) by Śākya'i dge bsñen chos dpal dar dpyaṅ*. Śata-piṭaka series, vol. 266. New Delhi: International Academy of Indian Culture 1981. [BDRC MW3CN8805]

Chag lo tsā ba'i rnam thar dang / dge 'dun chos 'phel gyi gnas yig. Dharamsala: Bod kyi dpe mdzod khang 2011, pp. 1–64. [BDRC W1KG20987]

Lo tsā ba rin chen bzang po dang / lo tsā ba blo ldan shes rab/ chag lo tsā ba chos rje dpal bcas kyi rnam thar. Lhasa: Ser gtsug nang bstan dpe rnying tshol bsdu phyogs sgrig khang 2016, pp. 108–236. [BDRC WA1KG25249]

Lo pan gyi rnam thar phyogs bsgrigs. Hongkong: Krung go'i shes rig dpe skrun khang 2018. [BDRC WA3CN21836]

【参考文献】

櫻部建「インド仏教滅亡時の事情をつたえるチベット文の一資料」『仏教史学』9 (1960): pp. 27–31.

田崎國彦「13 **世紀はじめのブッダ・ガヤー〔資料編〕——ダルマスヴァーミン『インド巡礼記』第** 4・5 **章訳註」『東洋学研究』**30 (1993): pp. 69–88.

中山照玲「インド仏教終焉のころ——チャ・ローツァワ・チュージェペル伝和訳（1）**——」『成田仏教研究所紀要』**17 (1994): pp. 213–249.

田崎國彦「ナーランダー仏教大学最後の光景〔資料編〕——ダルマスヴァーミン『インド巡礼記』第 10 **章訳註」『東洋学研究』**31 (1994): pp. 149–180.

dPal rtsegs bod yig dpe rnying zhib 'jug khang. *'Bras spungs dgon du bzhugs su gsol ba'i dpe rnying dkar chag*, 2 vols. Beijing: Mi rigs dpe skrung khang 2004.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計0件

〔学会発表〕　計0件

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関